

在外研修の成果

古代東アジアにおける冠帽等の装身具に関する研究

毛利光俊彦／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1998年9月1日から11月25日にかけて中華人民共和国に出張し、冠帽から靴に至る各種の装身具について、出土品や古墳・石窟寺院の壁画・彫刻などを調査研究した。訪問地は北半の吉林・遼寧・河北・河南・陝西・甘肅各省と、南の江蘇省に及んだが、中国社会科学院考古研究所や各省の研究所・博物館の厚誼によって、多くの成果を得ることができた。

冠帽については、吉林・遼寧両省で、高句麗や鮮卑の金属製品を種々実査できたのが第一の収穫。甘肅省莫高窟では、供養者像や説法図に傾注し、隋・唐代の中華の制と、周辺諸国人の夷俗との対比をみた。各地で展覧中の俑や彫像を通観した結果、文・武官以外に侍臣を冠から特定できることにも気づいた。

腰帯については、各地で各時代の遺品をみた。陝西省の白玉鍔帯は北周(557-581)で、鍔帯としては最古級である。唐代には丸軛・巡方の鍔板が一般化するが、丸軛の起源が鍔帯の円形鍔板にあるのではと予測している。なお、唐の乾陵(第3代高宗・則天武后陵)の石人がしめる帯の丸軛・巡方は、腰佩をとりつける右軛のみにあることに気づき認識を改めた。

靴については、日本・朝鮮半島の古墳出土金属製品に、前後綴と左右綴があることから、その起源を探した。皮や布の遺品は漢代からあったが、いずれも前後綴。新羅の左右綴の探求は今後の課題である。